

記念事業委員会より：

創立 50 周年記念事業の一環として、人科に在籍し、その来し方に深い関わりを持つ先生方から、人科での思い出や今後の人科に託したい希望などを伺うインタビューを実施しました。桑野園子先生からは、2021 年 7 月 20 日に人間科学研究科にてお話を聞かせていただきました。本稿は、インタビューに際して桑野先生があらかじめ作成してくださった原稿に基づくものです。桑野先生、どうもありがとうございました。

§ § § §

桑野園子（大阪大学名誉教授）

1. 教養部の改組

私が人間科学部に来ることになったのは教養部の改組があったからです。いろいろなプランがありましたが、1993 年に工学部環境工学科を併任し、その後、1994 年に大阪大学の方針で、人間科学部に移籍しました。そこで難波精一郎先生と一緒に環境心理学講座を担当することになりました。

それと同時に、工学部環境工学科の協力講座になりました。この 1994 年の改組に伴い、人間科学部と工学部の講義が増え、共通教育の講義はそのまま続けることになりました。また、人間科学部と工学部では会議や入試などの負担も増えました。しかし、一方では多様な学生が私たちの研究室に来ることになったことはとてもよかったことです。

2. 学生の配属

2016 年に横浜市で開催した国際心理学会議のキーワードが、「Diversity in Harmony: Insights from Psychology」でした。私たちの研究室はまさにこの「Diversity in Harmony: Insights from the Environment」で、文字通り、多彩なバックグラウンドを持つ学生が集まりました。環境心理学と環境工学がそもそも担当しているところの学生の背景なのですが、その他に音楽や情報、家政学、農学、芸術工学、生理学等々、さまざまな背景を持った学生が集まりました。

そのように多種多様な分野を勉強してきた学生たちでしたが、学生同士の仲が非常に良かったことはすばらしいことでした。異なるバックグラウンドにもかかわらず、お互いに教え合っていました。その雰囲気がいよいことがとてもうれしく思いました。そして、私が教授になってから定年までの 12 年間で、工学 7 名、人間科学 4 名の合計 11 名が博士号を取得しました。この他、環境心理学研究室の卒業生たちは現在もそれぞれの分野で活躍しています。

異なる分野、異なる場所でそれぞれが活躍していますので、みんなが集まって近況報告をし、情報交換をする機会として、難波先生の提案で、私が会長となり、環境心理学研究会を 2005 年から発足しました。卒業生を中心とした研究会で、毎年 1 回開催しています。東京や九州などからも参加者が集まりま

す。研究会という名のとおりに、午後から研究会をして何人かに研究発表をもらい、夕方からは懇親会をします。非常に楽しい会で、今も続いています。残念ながら、昨年と今年はコロナのために延期せざるを得ませんでした。

3. 難波・桑野の研究

3.1 変動音の評価

人間科学部に配置換えになる前から現在までの難波先生と私の研究について紹介します。私たちは変動音の評価をメインテーマにして研究をしてきました。当時、一般に定常音の短い刺激を対象とした聴覚の精神物理学的研究が主流でしたが、私たちは1960年代から変動音の評価に関する研究を続けてきました。生活環境で存在する音の大半が変動音です。その変動が情報を伝えます。勿論、心理学以外の応用分野で変動音の評価は行われていました。放送、建築音響、環境騒音などの諸分野です。変動音の評価に関してはそれぞれの分野で物理的測定値と主観量の関係について実用的な研究が行われていました。しかし主観量进行评估する指標に関してはそれぞれの分野で任意の指標が用いられ、時にはその優劣を巡って論争がありました。しかし、現実の環境音は複雑で提案された評価指標間に相関関係が存在したり、変動パターンによって最適の指標が異なったりして決着が付きませんでした。その上、主観量を測定する心理学的測定法の統制にも問題のあ

る研究が多数存在しました。

私達が変動音のラウドネスの精神物理学の実験を行うにあたっては刺激の物理量の指標を定める必要があります。現実の環境騒音を音源に用いると周波数変動や時間変動パターンが複雑で当時の技術ではそれを加工して、対立する仮説に基づいて構成された指標で表示された値が互に直交条件を満たすような刺激系列を作成することができませんでした。

そこで発想を転換して対立する仮説間の値が直交条件になるような変動音を人工的に作成することとしました。しかし、当時、変動音を発生する装置や測定する装置もなく、装置を作成することから始めました。それ以来、現在に至るまで、主な研究課題として変動音の評価に関する研究を人工音で仮説を立証し、その仮説が現実音を対象としても成立するか検証する実験を続けてきました。多くの実験結果に基づいて、 L_{Aeq} という等価騒音レベルが変動音のラウドネスの評価方法として優れていることを公表しました。ラウドネス・レベルの算出に関する国際標準 (ISO532-1) にも我々の方法が記載され、測定システムに組みこんでくれるメーカーも現れました。

なお、図1はその研究の一例です。横軸が物理量 (等価騒音レベル: L_{Aeq}) で、飛行機や新幹線、鉄道、自動車などのいろいろな音が入っています。われわれの環境にはいろいろな音が混在しているのが普通ですので、これらの音をランダムに提示し、その大きさを評価し

た結果が縦軸です。近似的にはこれらの音の大きさは L_{Aeq} で評価できることが分かります。

しかし、人の印象は物理量だけでは決定されません。例えばレベルの高い所では飛行機の音が過大評価になったり、音楽などが小さめに評価されたりすることが見られます。この相違は物理量だけでは説明できませんでした。

そこで、アンケート調査を行い、日常生活で大切だと思う音などについて、順位を付けてもらいました。音楽や音声が大切で、飛行機や新幹線の音は大切ではないということなど、認知的な要因が明らかになりました。図 1 でみられる音源による相違も、物理的な要因だけではなく、認知的な要因が関係していることが分かりました。

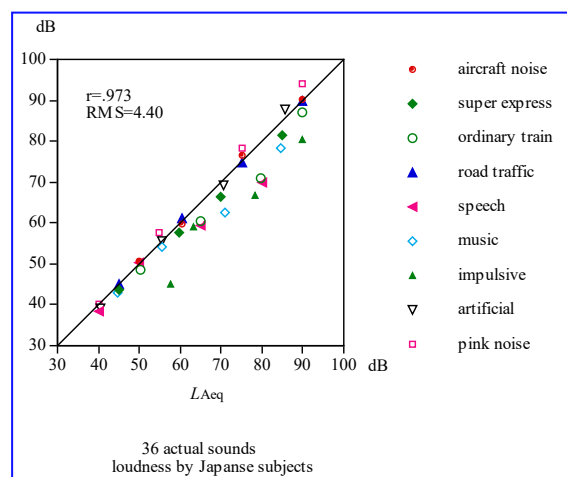


図 1 L_{Aeq} と種々の環境音の大きさとの関係 (難波・桑野, 音響誌, 1982)

そこで、この認知的な要因を分から

ないようにするために、時間変動のパターンは図 1 と同じですが、ピンクノイズを用い、同じレベル変動の音を作り、実験をしました。その結果、図 2 に示すように、音源間の差がほぼなくなりました。大きさの概念はニュートラルな概念ですが、そこにも認知的な要因が影響することが分かりました。

表 1 に私たちの論文の一例を示します。多くの論文が環境問題や環境基準の改訂に貢献しました。

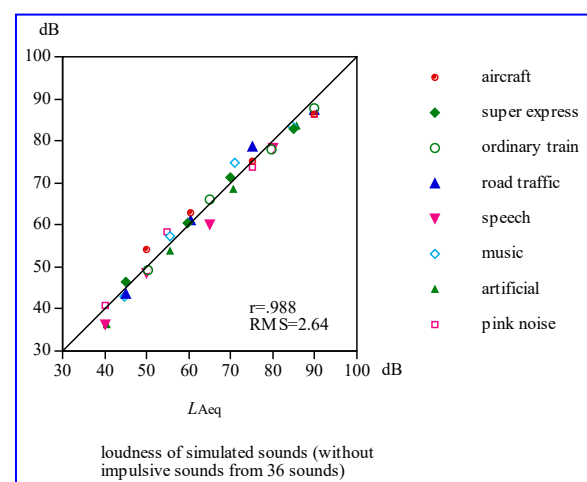


図 2 L_{Aeq} と種々の環境音の大きさとの関係。音はピンクノイズで作成したもの (Namba, Kuwano, Fastl, Jpn. Psychol. Res., 1988)

表 1 主な論文

S. Namba and S. Kuwano, "The relation between overall noisiness and instantaneous judgment of noise and the effect of background noise level on noisiness", J. Acoust. Soc. of Jpn. (E), 1, 99-106 (1980).
S. Kuwano, S. Namba and Y. Nakajima, "On the noisiness of steady state and intermittent noises", J.

Sound Vib., 72, 87-96 (1980).

難波精一郎, 桑野園子, 二階堂誠也, “カテゴリー-連続判断法による音質評価”, 日本音響学会誌, 38, 199-210 (1982).

難波精一郎, 桑野園子, “種々の変動音の評価法としての Leq の妥当性, 並びにその適用範囲の検討”, 日本音響学会誌, 38, 774-785 (1982). (昭和 57 年度日本音響学会佐藤論文賞授賞)

S. Kuwano and S. Namba, "Continuous judgment of level-fluctuating sounds and the relationship between overall loudness and instantaneous loudness", Psychol. Res., 47, 27-37 (1985).

S. Namba, S. Kuwano and A. Schick, "A cross-cultural study on noise problems", J. Acoust. Soc. Jpn. (E), 7, 279-289 (1986). (日本音響学会佐藤論文賞授賞)

S. Kuwano, S. Namba and H. Miura, "Advantages and disadvantages of A-weighted sound pressure level in relation to subjective impression of environmental noises", Noise Control Engineering Journal, 33, 107-115 (1989).

S. Namba, S. Kuwano, A. Schick, A. Açlar, M. Florentine and D. Zheng, "A cross-cultural study on noise problem: comparison of the results obtained in Japan, West Germany, the U.S.A., China and Turkey", J. Sound Vib., 151, 471-478 (1991).

S. Kuwano, S. Namba, T. Yamasaki and K. Nishiyama, "Impression of smoothness of a sound stream in relation to legato in musical performance", Percept. Psychophys., 56(2), 173-182 (1994).

S. Kuwano and S. Namba, "Evaluation of aircraft noise: Effects of number of flyovers", Environment International, 22, 131-144 (1996).

H. Fastl, S. Kuwano and S. Namba, "Assessing the railway bonus in laboratory studies". J. Acoust. Soc. Jpn. (E), 17, 139-148 (1996).

S. Kuwano, S. Namba, H. Fastl and A. Schick, "Evaluation of the impression of danger signals – comparison between Japanese and German subjects", in A. Schick and M. Klatte (Eds) *Contributions to Psychological Acoustics*, (BIS Oldenburg, 1997), pp.115-128.

S. Kuwano, S. Namba, M. Komatsu, T. Kato and Y. Hayashi, "Auditory and visual interaction in the aesthetic evaluation of environment", Empirical Studies of the Arts, 19(2), 191-200 (2001).

S. Kuwano, S. Namba, T. Mizunami and M. Morinaga, "The effect of different kinds of noise on the quality of sleep under the controlled conditions" J. Sound Vib., 250 (1), 83-90 (2002).

S. Kuwano, T. Okamoto and S. Namba, "Psychological evaluation of sound environment of a high-speed train", J. Sound Vib., 277, 491-500 (2004).

S. Kuwano, T. Yano, T. Kageyama, S. Sueoka and H. Tachibana, "Social survey on wind turbine noise in Japan", Noise Control Engineering Journal, 62 (6), 503-520 (2014).

J. Schlittenlacher, T. Hashimoto, S. Kuwano and S. Namba, "Overall judgment of loudness of temporally varying sounds", J. Acoust. Soc. Am., 142 (4), 1841-1847 (2017).

また、私達は社会へも貢献してきました。表 2 に難波先生の代表例を示します。さまざまな国や地方自治体の委員を歴任されています。

表 2 難波先生の委員履歴の例
(年号は就任年)

池田市環境保全審議会委員 (1974)

大阪府公害対策審議会専門委員（1974）
 （財）関西空港調査会騒音・振動調査委員会委員
 （1980）
 大阪府公害審査会委員（1982）
 環境庁近隣騒音対策検討会（1984）
 大阪市公害対策審議会委員（1984）
 深夜営業騒音対策調査検討委員会委員（環境庁）
 （1984）
 拡声器騒音対策検討会委員（環境庁）（1986）
 関西国際空港環境監視検討委員（大阪府）（1986）
 大阪市近隣騒音対策モデル事業検討会委員
 （1986）
 大阪国際空港における環境対策に関する調査検
 討委員会委員（運輸省）（1988）
 大阪市地域環境管理計画検討委員会委員（1989）
 箕面市環境影響評価専門委員（1992）
 中央環境審議会特別委員（総理府）（1993）
 大阪市環境審議会委員（1994）
 大阪府環境審議会委員（1994）
 公害等調整専門委員会専門委員（総理府）（1994）
 公害等調整専門委員会専門委員（総理府）（1996）
 中央環境審議会臨時委員（環境省）（2001）
 日本学士院会員（2007）

表 3 に私の委員履歴の例を示します。
 環境省や国土交通省，総務省などの国
 レベルや，大阪府や三重県などの府県
 レベル，吹田市等の市のレベルなど，さ
 まざまな委員をしました。

教授会でもご紹介いただきましたが，
 2005 年のまだ現役の頃には日本学術会
 議の会員になりました。会員の任期が 6
 年で終わった現在も，連携会員として
 続けています。また，表 3 の上から 3 行
 目にありますように，大阪府公害審査

会の委員もしています。1994 年から現
 在まで続けており，公害，特に近隣の問
 題でもめ事が起きた場合に調停をする
 委員会です。

表 3 桑野の委員履歴の例

環境省：在来鉄道騒音指針検討会委員（1992-1996）
 通産省：産業技術審議会専門委員（1994-2001）
 大阪府：公害審査会（1994-現在）
 通産省：産業技術審議会専門委員（1999-2001）
 大阪府：環境影響評価審査会委員（2014 年から会長）
 （2000-2016）
 環境省：中央環境審議会臨時委員（2001-2013）
 環境省：環境省総合研究開発推進会議検討員
 （2002-2010）
 環境省：独立行政法人評価委員会臨時委員
 （2003-2005）
 環境省：独立行政法人評価委員会委員（2005-2013）
 大阪府：環境審議会委員（2004-2014）
 内閣府：日本学術会議会員（2005-2011）
 日本学術会議：日本学術会議連携会員（2011-現在）
 総務省：公害等調整委員会専門委員（2010-2012）
 三重県：環境影響評価委員会委員（2011-現在）
 滋賀県：環境審議会委員（2012-2020）
 （一財）小林理学研究所：評議員（2012-現在）
 放送大学：客員教授（2012-2016）
 滋賀県：公害審査会委員（2012-現在）
 環境省：風力発電施設から発生する騒音等の評価手法
 に関する検討会委員（2013-2017）
 国土交通省：交通政策審議会臨時委員（2013-215）
 国土交通省近畿整備局：兵庫国道事務所名神湾岸連絡
 線環境影響評価技術検討委員会委員長（2018-2021）
 成田国際空港：航空機騒音健康影響調査委員会委員
 （2019-現在）

国際学会でもいろいろな役職をしました。国際学会ではアメリカ音響学会のフェロー（難波・桑野共）を、国際音響学会では副会長を、人間科学部と関係の深い国際心理科学連合（IUPsyS）では理事をしていました。そして、国際会議の運営については数えきれないほど、さまざまな立場で参加しました。上述しました 2016 年に横浜で開催されました国際心理学会議では組織委員会副委員長をしました。また、先の話ですが、2023 年に日本で行われる国際会議の組織委員会にも入っています。国内の学会では日本音響学会や日本音楽知覚認知学会において、難波先生も私もそれぞれ会長を務めました。

受賞などにつきましては、難波先生は 2007 年に学士院の会員になられ、2009 年には瑞宝重光章を授与されました。さらに、環境保全功労者として、環境大臣から難波先生も私も表彰されました。

その他、2018 年に日本心理学会から国際賞の功労賞をいただきました（写真 1）。



写真 1 日本心理学会国際賞受賞風景

2019 年にはドイツ音響学会からヘルムホルツ・メダルを授与されました（写真 2）。

ドイツ・アーヘンで開催された国際音響学会議の開会式のときに表彰されたのですが、写真 3 がその様子です。



写真 2 ヘルムホルツメダル



写真3 ヘルムホルツメダル受賞式風景



写真4 ヘルムホルツメダル受賞後

私たちがずっと共同研究をしていたドイツの研究者達が駆け付けてくださって、表彰式の後、一緒に写真を撮りました。写真4の左側からオルデンプルク大学のSchick教授、真ん中がSchick夫人、その次がアイヒシュタット大学のHellbrück教授です。右端がミュンヘン工科大学のFastl教授です。

この3人と非常に長く、今も親しくしています。

写真4に写っている3人を中心に、cross cultural studyを続けてきました。このきっかけは、ドイツのSchick先生が私達の論文の別刷りを請求してこられたことです。その1通のはがきから始まり、40年以上交流が続いています。

難波先生が定年で退官されるときには、退官記念として、“Recent Trends in Hearing Research” (H. Fastl, S. Kuwano, and A. Schick (Eds.), BIS Oldenburg, 1996) という本を出版しました。共同研究や国際会議等で常々親しくしていた様々な国の18人の方々が執筆してくださいました。

写真5の本は私が退官するときに、先ほどの特に親しいドイツの3人の方と、難波先生と私が書いて大阪大学出版会から発行しました。本の表紙に用いた写真はドイツの研究室の音響関係の設備を見せていただいたときに私が撮ったもので、気持ちよく利用することをお認めいただきました。

3.2. Cross-cultural study

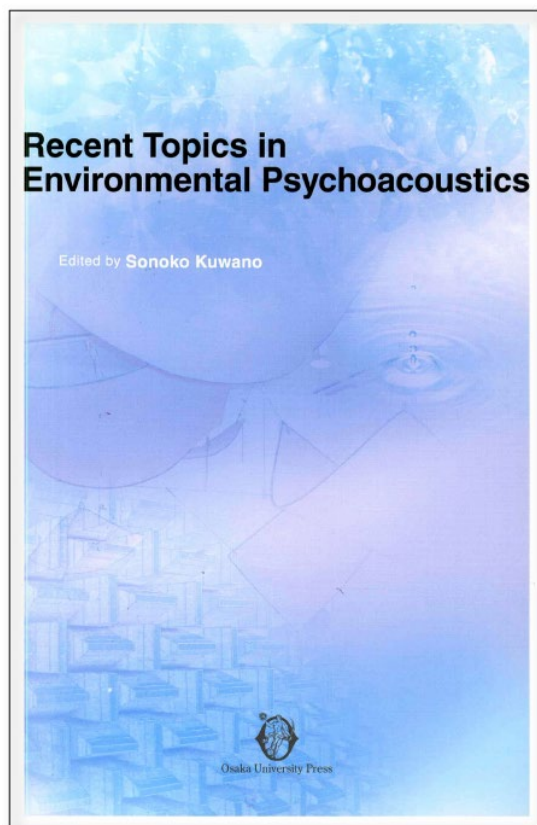


写真 5 桑野の定年時に出版した本

また、難波先生と私で、『音の評価のための心理学的測定法』（コロナ社、1998）という本を出版しました。音の研究をしている人は圧倒的に工学系など理科系の方が多く、心理学的測定法を正しく理解してもらうために、書いた本です。

この本はこれを見れば実験ができるように記述し、この中に掲載したデータは全て、私たちが実験を行って得たデータです。おかげさまでこの本はよく利用していただいています。

オルデンプルクから西方のオランダに向かった所に (Bad Zwischenahn) という所があります。ここで音響心理学に

関するシンポジウムを Schick 教授の主催で開催され、写真 6 に示す参加者全員が同じ所に泊まり、お昼は研究発表をして、夕食が終わると飲みながらディスカッションをしました。これは 2, 3 年に 1 度、開催され、参加者同士がとても親しくなれる会でした。

私たちも参加しており、特に私は 3 回目以降、ほぼすべて参加しました。最初の 2 回はそれほどきちんとした形ではなく、ドイツ語で交流されていました。その後、いろいろな国の人々が招待されるようになり、英語で発表・出版が行われ、9 回まで続けました。



写真 6 オルデンプルクシンポジウムの参加者

(1) 近隣騒音に関するクロスカルチュラル研究

難波先生がオルデンプルクに滞在された折に近隣騒音に関するクロスカルチャル研究を開始し、その後日本、ドイツ、アメリカ、トルコ、中国の5か国で調査をしました。

私は豊中市に住んでいます。オルデンプルクは豊中市の面積の3倍ほどで、人口は約3分の1です。広くて人口密度が低い場所なので、戸建ての住宅では環境がだいぶ違います。そのためなるべく、豊中市に近い集合住宅の住民を対象として調査をしました。

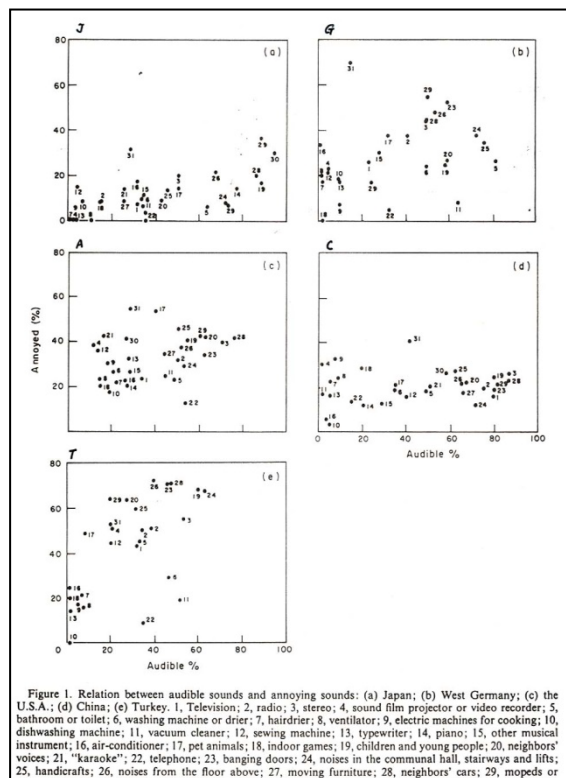


図3 5か国での調査結果の例

図3は結果の一例です。少し読みにくいかもしれませんが、いろいろな音源があります。私と難波先生で音源を選別して持っていき、Schick 教授と一

緒にディスカッションをしているうちに30個ほどにふくれあがりました。グラフの横軸はそれぞれの音が聞こえるかどうかの%で、縦軸が聞こえたときにその音がうるさいと思うかどうかの%です。聞こえる音は国によっても違いますので横軸の値はそのまま比較できませんが、聞こえるとうるさいかは比較できます。それがこの図です。

日本ではもの売りの声やオートバイの音など、外から空気を伝わってくる音をうるさいと感じています。ドイツの場合、大きく違っていたのは固体を伝わってくる音をうるさいと感じることです。バスルームの音や日曜大工の音などです。また、どの国でもこれほど多くの音源のリストを用意していても、「その他」という回答が多くあることが特徴的です。リストにある音源の中に入っていない音があることがわかりました。まさに近隣騒音の特徴を示しています。

(2) ミュンヘン工科大学 Fastl 教授との共同研究

Hauptbahnhof (ミュンヘン中央駅) から少し北へ行った所が Königsplatz です。この近くに研究所がありました(現在は近くに移転しています)。有名な2つの美術館 Alte Pinakothek, Neue Pinakothek は研究室の窓から見えていました。

Fastl 教授とは、1983 年にパリで国際会議があったときにある程度の打ち合わせをして、1984 年に彼が私たちの教養部の研究室に来られました。それ以来、1 年おきに私が行ったり、彼が来たりして、ずっと続けました。最後に私が行ったのは 2016 年で、ごく最近まで続けていました。

それと同時に国際会議では、毎年 Structured Session を一緒にオーガナイズして、2021 年にワシントン DC で開催された国際騒音制御工学会議でも一緒にオーガナイズしていましたが、残念ながら Covid-19 のおかげで virtual congress になりワシントン DC に行けなくなりました。アメリカの時間で開催されますので、時差があり、日本とは昼夜が逆になり、ほとんどの発表が真夜中に開催されますので、深夜、早朝にしか参加できませんでした。

写真 7 は、人間科学部の東館の建物の完成時に式典があり、私たちの防音室に当時の総長だった岸本先生が見に来てくださいました。そのときに滞在していた Fastl 教授と話をされている写真です。この奥からのぞいている方は、アメリカのボストンのノースイースタン大学で同じような研究をしている Hellman 博士です。たまたまこのときに来られていました。彼女とは、私が初めてミュンヘンに行ったときに同じ宿泊先でした。かなり長期間滞在しましたので、時々、一緒に食事をしたり、研究室で話したりして、親しくなりました。



写真 7 人間科学部東館竣工式の折、環境心理学研究室の防音室で。

Professor Zwicker は音響の分野を研究している人は知らない人はいないような有名な方ですが、その方がこのミュンヘン工科大学電気音響研究所を 1967 年に創設されました。彼が Full professor, その下が Terhardt 先生です。その下が Fastl 先生です。この 3 人だけがテニュアです。そして、私のような外国からの客員研究員がいます。そして大学で雇用されているアシスタントと、いろいろな所からの委託研究で雇っている Mitarbeiter がいます。日本と違い、お給料が支払われ、この研究所の仕事をしながら、学位論文を書いていた。うらやましいのは、この研究所専任の技官が 8 人いたことです。何かケーブルがおかしかったり、装置の調子が悪かったりしても、翌日には直ってきます。さらに、秘書が 2 人います。そのような構成でした。Zwicker 先生が定年で辞められた後に Man-Machine Communication 研究所という名前に替わりしました。今もそのまま続

いています。

写真 8 に示すのが共同研究に用いた free-field equalizer とヘッドホンです。録音した音をヘッドホンやスピーカを通すと、元の音とは変わってしましますが、この free-field equalizer とヘッドホンの組み合わせで、現実の音と同じ音が再生できます。これを私のところにも 1 セットいただき、ミュンヘン工科大学と大阪大学で同じ条件で刺激を提示することができました。

40 年間の長期にわたり、種々の音のラウドネスを中心に、鉄道騒音のボーナス（物理量が同じ時、航空機騒音や自動車交通騒音に比べて、鉄道騒音のうるささが低いため、鉄道騒音の基準を緩くすること）、危険信号音の国際比較、音の記憶、等々、種々の研究を行ってきました。



写真 8 共同研究に用いた free-field equalizer とヘッドホン

3. 学生の国際交流

難波先生と私が行ってきた国際交流を学生にも広げたいと思いました。

ミュンヘン工科大学と大阪大学は大学間の学生交流協定を結んでいました。今もあると思います。オルデンプルク大学とはなかったもので、私と Schick 教授が中心となって、大阪大学工学部・工学研究科とオルデンプルクの該当学部で、部局間の協定を結びました。そうすることによって、学生の交流が進みました。

ご存じのとおり、ドイツの大学は授業料がほぼ不要でした。あるときから 1 万円ほどかかるようになりましたが、それでもゼロに近く、こちらから行くのには非常に楽でした。しかし、ドイツから日本に来る場合は高額な授業料がかかります。そのような状態ですと、ドイツから来ることが難しくなるので、オルデンプルク大学とはそのようなことがないように、協定を結びました。

そうすることで、授業料がいらなくなり、単位も大阪大学で取った単位がドイツでも有効になるように、互換性を持たせることができるようになりました。この交流協定は非常によい制度です。

そして、ドイツのオルデンプルク大学からは 3 人、ミュンヘン工科大学からは 2 人が来日しました。その学生たちは、私たちが一緒に研究していた先生方の研究室の学生です。半年から 1 年ほど環境心理学研究室に滞在し、修士論文などの研究をしました。日本からドイツへは、環境心理学研究室の学生が 2 名訪問し、また、環境工学から教授と助教授がオルデンプルク大学を訪れています。とてもいい制度です。

写真 9 は環境心理学研究室の防音室での実験風景です。私たちの研究室に滞在したドイツの学生たちは、当時の研究室にいた日本の学生と帰国後も交流が続いています。

環境工学科の 50 周年記念式典が 3 年前に開催されましたが、わざわざ、そのためにドイツから駆け付けてくれました。写真 10 は式典後のパーティでの写真です。



写真 9 環境心理学研究室防音室での実験風景



写真 10 環境工学科 50 周年記念式典

4. 将来の人間科学部への期待

「学際性」「実践性」「国際性」の理念を柱に、社会に貢献する 個性豊かな人材を育成します。

な人材を育成します。

(大阪大学人間科学部ホームページより)

これは大阪大学人間科学部のホームページに記載されているものです。学際性、実践性、国際性の理念を柱に、社会に貢献する個性豊かな人材を育成しますと書いてあります。まさにどれも私たちがしていたことです。ここは日本で初めて創設された人間科学部です。創設時より文理融合を実現した学部でもあります。これは素晴らしいことです。

私の人間科学部・人間科学研究科の将来への期待は、オリジナリティーのある研究や国際的に認められる研究をしてほしいということです。また、大阪大学だけに限りませんが、長期的な研究ができる環境をつくることが大切です。

研究を推進するために、科学研究費を申請することや、委任経理金などを積極的に集めて研究の社会への還元に努力する姿勢は結構と存じます。ただ科学研究費にしても委任経理金にしても、結果を早く出すことが求められます。またともすれば流行のテーマが採択される可能性もあります。

しかし、基礎研究の場合には地道な努力を継続しても短期間では成果が得られない未開拓な分野も存在します。そんな場合でも大学への運営費交付金が継続して与えられることによって、長い努力と工夫の上に世界から注目される成果が得られことがあります。このことがこれまで日本の基礎研究のレ

ベルを維持し向上させてきたと思います。

研究者の興味に根ざし、長期的な努力の結果、独創的な成果が得られる体制を育てられることが大切だと思います。

人間科学部創設 50 周年という記念の折にこのような紹介を書かせていただく機会を与えていただきまして感謝いたします。

今後の人間科学部・人間科学研究科の発展を期待しております。